

# 異議あり

## 中学の武道必修 柔道に「待て」

死亡事故が多発。初心者が教える怖さ。経験者を招き安全対策を

来年度から中学校で男女とも武道が必修科目となる。柔道、剣道、相撲から選択するが、柔道を選ぶケースが一番多いと見られている。だが、がん治療の最前線に闘う医師で、柔道家としても知られる二村雄次さんは、安全対策が不十分として、このままの必修化に警告を発している。柔道を愛する気持ち強いがゆえの「教育的指導」だ。

「柔道では子供の事故が非常に多いですね。想像を絶する世界だったね。中学・高校での柔道の事故を詳しく調べている内田良名古屋大准教授からデータを寄せられた。1983〜2009年度の27年間で、学校で柔道をしていて亡くなった生徒が110人もいた。中学37人、高校73人、大半はクラブ活動中だった」

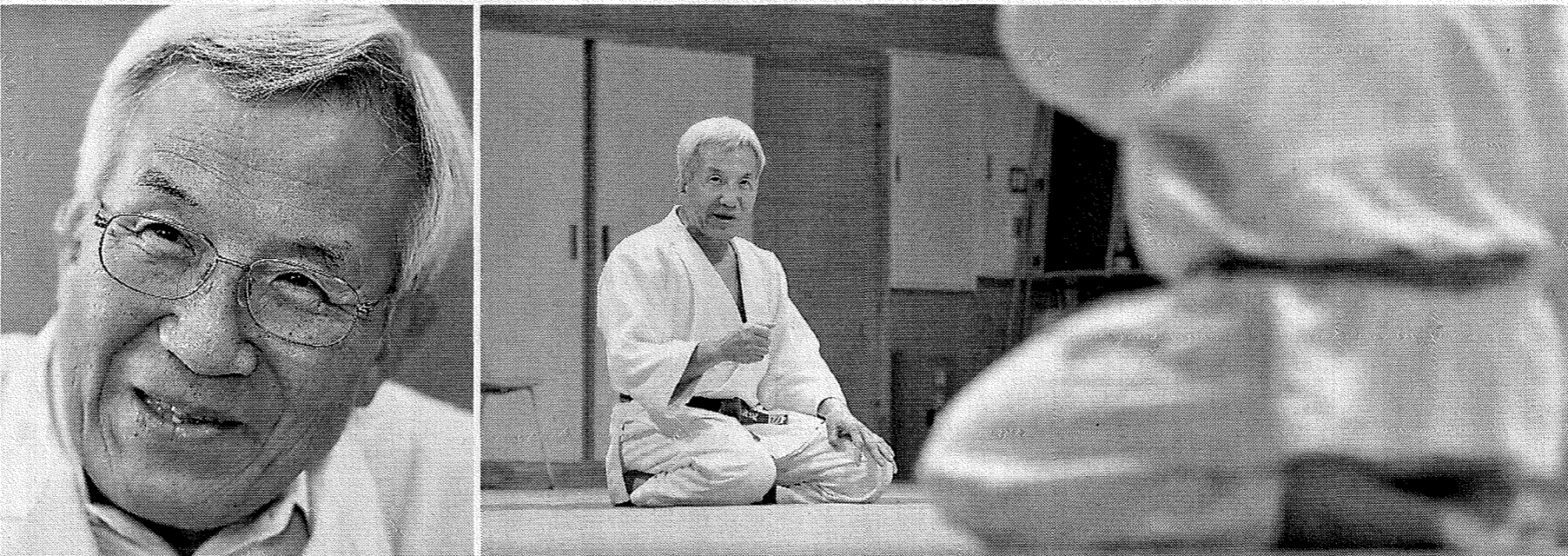
「けがも多いです。同じ期間で、軽度のもも含め後遺症が残る障害事例が275件。うち3割は体育の授業中です。なぜ、こんなことに。」「死亡した学年は中高とも1年生が5割を超えている。つまり初心者が多い。受け身など基本技術が未熟な子供への無理な指導や、体調が急変した際の対処の仕方がよくなかったケースもある」

「直接、頭などに衝撃を受けることだけが死因じゃない。投げられて体が回転した際に脳が揺さぶられ、静脈が切れることもある。柔道における加速損傷は、私自身もあり知らなかった」

「中学での必修化は来年に迫っています。」「柔道経験が豊富な体育教師の絶対数が足りない。有段者も限られている。そのため都道府県の教育委員会などは、中学教員の講習会を開いてきた。私も参加したが、基本動作や技の説明と実技が中心で、短い日程で終わった。初心者が初心者を教えることになる。心配になったね」

「学校に子供を預ける親は不安ですね。どうすれば?」「補佐役に外部講師を招くのはどうか。全国には実業

にむら ゆうじ 二村 雄次さん (68) 師範として学生を指導、愛知県がんセンター総長



一名古屋市、恵原弘太郎撮影

来年度から男女とも

子供の体力低下などを受けて学習指導要領が08年3月に改訂され、12年度から中学1、2年時の武道(柔道、剣道、相撲)の必修が決まった。国の教育振興基本計画では「我が国固有の伝統的な文化である武道の振興を支援す

る」とされた。どれを選択するかは、設備などの事情なども踏まえながら、最終的に学校の判断に任される。地域的特性により弓道やなぎなたなどを選ぶこともできる。中学は全国で約1万校あり、来年度の1、2年は計約240万人。必修に備え、武道場の整備などが進められている。

は、中1で教える技に、体落としや大外刈りが入っている。少ない時間でそんな投げ技まで教えられるのか。個人的には怖いと感じている」

「けが防止には体力をつけることが大事だ。1年時の前半は寝技を重点的に教えるなどして、ある程度の体力をつけてから、投げ技を教えるのはどうだろう」

「世界的なスポーツですが、海外ではどうですか。」「欧米の柔道関係者に死亡事故があると伝えると、信じられないと言われる。日本の3倍の60万人近い柔道人口があるフランスには、柔道指導者の国家試験がある。プロの指導者が地域のクラブなどで教え、学校の授業で教えることはない。安全面にも非常に配慮している。大人が子供をいきなり投げるなんてないし、受け身などの練習も低い位置から始めたり、体を支える補助役をつけたりする」

「日本では安全面がなぜ軽視されたのでしょうか。」「知人の元欧州柔道チャンピオン、ミッシェル・ブルース・ポルドー大教授は『日本には素晴らしい指導者がたくさんいるが、勝敗にこだわら過ぎるのは』と指摘している。技の習得に偏った指導だったかもしれない。部活動にもそういう面はある」

立てをしているのですか。」「全日本柔道連盟(全柔連)の医科学委員会が頭部外傷発生時の対応マニュアルを作成し、安全指導プロジェクト特別委員会が『柔道の安全指導』の冊子を改訂した。指導者資格制度も13年度からやると始める。講習会の受講と試験を義務つけて、数年ごとの更新制にする。ただ、この制度は教員は例外となる予定だ。全柔連が教員に資格を認定できないのだが、子供の親は、資格を持つ指導者が教えてほしいのが本音だろう」

「第三者による柔道事故調査委員会を設けるべきだ。原因を突き詰め、再発防止策までつくる。二度と被害者を出さないために絶対に必要。昨年設立された全国柔道事故被害者の会も安全指導の徹底を訴えている。そうした声を真摯に受け止めなければならぬ。教育界、柔道界の責任は重い。私は医療事故では『逃げない、ごまかさず、隠さない』という姿勢が大事だと言いつつ続けた。柔道事故でも同じことを強く言いたい」

### 取材を終えて

「フランスでは、道徳教育のために柔道の子供に学ばせている。しつけを重視し、視察した柔道教室でも、礼ひとついついてすごく細かく厳しく指導していた。『礼に始まり礼に終わる』という柔道の基本精神が浸透していた。一方で、柔道そのものはゲーム感覚で楽しく教えていた」

「柔道事故を調べた内田准教授は、独立行政法人日本スポーツ振興センターが毎年発行する冊子のデータを基にした。中学での柔道の死亡確率(10万人当たり)は2.376人。次のバスケットボールが0.371人なので、突出して高い。09年秋にウェブ上で独自の分析結果を公開し、実態を初めて明らかにした。必修化は前年に決まっていた。子供を持つ親はどう思うだろう。(金重秀幸)

43年生まれ。名古屋大医学部卒。胆道がん治療の世界的権威として知られる。07年から現職。名古屋大柔道部師範として、今も学生を指導。マスターズ全国大会で優勝も。柔道6段。全日本柔道連盟医科学委員会副委員長。著書に「胆道がんへの挑戦」。

団、大学、警察などの柔道部OBがたくさんいる。地元で柔道連盟と連携して、信頼できる人を呼ばばいい。外部講師は必修化のパイロット校ではすでに導入されている」

「それでも細心の注意が必要ですよ。」「柔道の授業は1年間で十数時間程度。文科省の指導の手引で

打って動けなくなった。けがのリスクは常にある。ましてや今の子供は体力が落ちていきる人を呼ばばいい。外部講師は必修化のパイロット校ではすでに導入されている」

「柔道経験が豊富な体育教師の絶対数が足りない。有段者も限られている。そのため都道府県の教育委員会などは、中学教員の講習会を開いてきた。私も参加したが、基本動作や技の説明と実技が中心で、短い日程で終わった。初心者が初心者を教えることになる。心配になったね」